



第七輯

支那事變報國美談  
輝く忠誠

海

特 252

372

軍事普及部編纂



海軍協會發行



始



特252  
372

本輯は海軍省海軍軍事普及部發行の「支那事變  
報國美談」(第七輯)と同じ内容のものです。

### 序

今次事變勃發以來、我が忠勇武烈の海軍將兵諸士が、陸戰隊に、空襲部  
隊に、或はその他の任務に勇躍奮闘して、絶大の偉勳を奏しつゝある輝く  
忠誠美談は、燃ゆるが如き銃後の報國美談と共に、日本精神を遺憾なく發  
揮して居るが、之を不朽に傳へ、國民精神の作興に資すべく、海軍省海軍軍  
事普及部では之等の美談を編纂、本協會から廣く江湖に贈ることゝなつた  
日本國民たるものは何人も一讀すべきものと思ふ。



昭和十四年三月

社團海軍協會  
法人

支那事變 報國美談 輝く忠誠 (第七輯)

目次

一、殊勳畏くも上聞に達した古賀一等航空兵曹……………一  
二、孝感上空の散華、得猪中佐と今村大尉……………五  
三、天長の佳節、漢口大空襲……………九  
    (イ) 世界史上未曾有の大空中戦……………九  
    (ロ) 血戦を語る梶原福松航空兵曹長の手記……………一三  
四、海の荒鷲生還記……………二一  
    不時着機とジャンク群との交戦……………二一  
五、一騎當千の上海陸戦隊、廣中路の激戦……………三五  
    (イ) 貴志中隊長の壯烈なる戦死……………三七

(ロ) 豪勇無双の園畑兵曹長とその部下……………四〇  
(ハ) 勝村特務少尉とその部下の奮闘……………四六  
(ニ) 油公司の肉弾戦……………四九  
    竹邊兵曹外八名、頑敵を撃破……………四九  
(ホ) 山田特務少尉の奮戦……………五三  
    「もう一發撃たしてくれ」と奥山一水の壯烈なる最期……………五三  
(ヘ) 白衣の勇士が語る廣中路の血戦……………五五  
    (一) 鮮血淋漓、傳令に従事した岡崎一水……………五五  
    (二) 機銃陣地に勇戦した田村一水……………六一  
六、「死なして下さい」と血書出願……………六三  
    念願叶つて名譽の戦死……………六三  
七、帝國軍艦乗員として第一線に一人の半島青年……………六七  
    柳七鳳割烹員の感激……………六七

八、陣中からさし延ばされた日鮮融和の手

海軍一等水兵太田光雄の美譽と朴烈……………六九

九、獻金美談

(イ) 戦線の兄と銃後の妹

美はしき兄妹の至情から生れた国防獻金……………七

(ロ) 還らぬ海の荒鷺からの国防獻金

韶關空襲に散つた奥西二等航空兵曹の遺書……………八〇

(ハ) 美術報國

「不動明王」の名作その他獻納佳話……………八四

表紙  
寫眞

屋上陣地より頑敵を猛射する我が海軍陸戦隊の勇士

(昭和十二年八月十八日上海最前線に於て)

——「アサヒグラフ」より轉載——

支那事變 報國美談 輝く忠誠 (第七輯)



殊勳畏くも上聞に達した古賀一等航空兵曹

狀

海軍一等航空兵曹 古賀清登

昭和十二年九月十九日ヨリ十二月九日ニ至ル間海軍〇〇航空隊戦闘機操縦員トシテ

屢次ノ空襲ニ参加シ其ノ間南京及南昌上空ニ於ケル前後五回ノ空中戦ニ於テ沈着果

敢常ニ衆敵ヲ制シ單機克ク敵戦闘機十一機、敵重爆撃機二機ヲ擊墜シタルハ武勳顯

著ナリ

仍テ茲ニ感狀ヲ授與ス

昭和十二年十二月三十一日

支那方面艦隊司令長官 長谷川 清

古賀兵曹は單機克く次の如き輝く戦果を収めたものであつて、その勇戦奮闘振りは眞に驚嘆の外なく、我等は今、古賀兵曹が群がる敵機を相手に、支那大陸の上空を飛鳥の如く縦横無盡に翔けめぐり、颯爽たる英姿を想見して、血湧き肉躍るを禁じ得ないものである。

即ち南京上空では、昭和十二年九月十九日、敵カーチス・ホーク型二機を撃墜したのを初めとし、九月二十二日同二機、十月六日同三機、十一月二十四日E十六型敵戦闘機一機、十二月二日マルチン敵重爆撃機二機、合計十機を、又南昌上空に於ては、十二月九日E十六型敵戦闘機三機を撃墜し、前後五回の空中戦闘に於て敵機十三機を撃墜した。

部隊長千田大佐は、次のやうに古賀機の壯烈果敢な奮戦振りを絶讃してゐる。

「十月六日の南京空襲に於て、古賀機が氣がついた時には、敵の數機が我が後方上空から襲つて来る。古賀機は機首をかへして敵の眞只中に突込み、その一機の操縦者の



古賀一等航空兵曹

顔が、ハッキリ見える距離迄寄り、之に猛射を浴びせる。操縦者は座席でガツクリと首をたれて戦死し、錐揉みになつて落ちて行く。續く一機は火を吐き、焰の尾を曳いて弾丸のやうに落ちる。獅子奮迅の古賀機の働きに恐れをなして逃げようとする一機を、地上數十米の低空まで追詰

め、之にとゞめを刺して悠々と歸還したのである。多數と渡り合ひ、その三機を撃墜したのには、われわれ全く頭が下がる思ひがした」と。

古賀兵曹は昭和十三年一月内地に凱旋し、某海軍航空隊教員の要職に就いたが、今次事變に際し、個人に感狀を授與されたことが既に無上の榮譽であるのに、目出度く

祖國に凱旋した上に、今回その殊勳が長くも上聞に達せられたことは、武人の名譽蓋し之に過ぐるものはなからう。

四

海軍一等航空兵曹 古賀 清 登略歴

原籍 福岡縣八女郡黒木町大字今一七番地  
生年月日 明治四十三年六月三十日  
略歴 昭和二年六月一日 佐世保海兵團ニ入團  
同 五年五月三日 第十六期飛行練習生  
同 五年六月一日 第十六期操縦練習生  
同 六年五月一日 卒業、航空章授與、命海軍一等航空兵  
同 九年七月八日 霞ヶ浦海軍航空隊教員(當時二等航空兵曹)  
同 十年五月一日 任海軍一等航空兵曹  
同十二年七月十四日 ○○海軍航空隊員トシテ從軍  
同十三年一月四日 ○○海軍航空隊教員

本人ハ入團後最初信號兵トナツタガ、前記ノ通り昭和五年五月飛行練習生トナリ、爾來今日ニ至ル迄我海軍航空隊ニ勤務スルコト八年有餘、此ノ間飛行機搭乗員トシ

テノ本人ノ適性ハ再度海軍航空隊教員ノ重職ヲ膺チ得、昭和九年度竝十一年度ノ兩回ニ互リ航空優等章ヲ授與サレ、今回特ニ海軍航空兵曹長ニ進級セシメラレタ。

二、孝感上空の散華、得猪中佐と今村大尉

我が海軍航空隊の精銳○○機は、昭和十三年四月二十六日、大舉して敵軍の本據武漢方面を空襲すべく、勇躍基地を出發したが、この日中支の空は朝來暗雲の徂來頻にして、敵地に近づくに従ひ天候は愈々險惡化して來たので、我が機隊は一旦攻撃を中止して基地に引揚げた程であつた。

然し漢口の西北方孝感は、敵空軍有數の根據地であつて、その飛行場に外國から輸入される多數の敵補充機があることは、略想像に難からざる所であつたので、この日午後二時半、指揮官得猪治郎中佐は密雲を利用し、新銳○○機を率ゐて孝感飛行場偵察竝に爆撃のため基地を發進、暗濤たる雲を衝いて幕進して行つた。

五

やがて孝感附近上空に達するや、果せる哉多数の敵戦闘機が現れて我を包围し、こゝに雲の真只中で凄烈なる空中戦が演ぜられたが、本戦闘以後、指揮官機は杳としてその消息を絶ち、得猪中佐はこの時密雲の中で壯烈なる戦死を遂げ、尙當日行を共にした今村武夫中尉も、同時に名譽の戦死を遂げたものと認定せらるゝに至つた。



得猪中尉

一念に燃え上つたのであつた。かくて漢口、孝感方面に敵機集中を確め、遂に天長の佳節、漢口上空の大空中戦に於て敵機五十一機を撃墜し、世界航空戦史上、空前の戦果を収めたことは、得猪中佐の

得猪中佐は實に我が海軍航空隊の至寶、渡洋爆撃隊の生みの親、育ての親の一人と謳はるゝ人、その戦死の報一度傳へらるゝや、我が海軍航空將兵達は痛恨措く能はず、愛惜の情はやがて悲憤の涙となり、復讐の

爲に恨みを晴らすと共に、何よりの供養ともなつたと謂へよう。

得猪中佐は頭腦明晰、細心緻密の上に、大膽豪放な一面があり、飛行將校として眞に天稟の才があつた。最近、航空廠飛行實驗部員、航空母艦分隊長、館山航空隊飛行



今村海軍中尉

隊長等の要職に歴任し、その間常に獻身的努力を傾注して、我が海軍航空の進歩發達に寄與せる所、極めて大なるものがあつたが、就中特筆大書さるべきことは、今次事變に際し、世界を驚倒させた我が海軍渡洋爆撃隊に關する器材の完成、並に人員の練成等に貢獻した所最も大であつたことで、我が渡洋爆撃隊今日の輝かしき戦果は、實に同中佐の獨創的研究努力の實であつたと謂ふも、強ち過言ではなからう。

得猪中佐は今次事變勃發に先だち昭和十二年四月、選ばれて獨逸に出張を命ぜら

八  
れ、同國航空隊に在つて貴重なる研究に専心從事中であつたが、遂に自分が建設に必死の努力を注いで來た、渡洋爆撃隊の壯舉を耳にし、而も自ら手鹽にかけた逸材新田中佐、吉田少佐等の戦死の報に接するに及んで、居ても立つても居られず、速かに出征を志願して急遽歸朝を願出たのであつた。かくて同年十一月歸朝、翌十二月漸く願望叶つて〇〇飛行長として勇躍出征の途に上つたのであるが、歸朝後の一ヶ月間は、寢言にも「未だ出征出來ぬか」と、その日を一日千秋の思ひで待ち侘びてゐたのであつた。今村中尉は資性謹嚴實直、人格高潔にして典型的武人の倂あり、前途有爲の空の勇士であつて、彼の蘭州攻撃にも參加して殊勳を立てた人であつた。寔に痛惜に堪へない。

同中尉は東京の人、府立四中の出身である。

原籍 海軍中佐 得猪治郎略歴  
富山縣射水郡伏木町古國府一番地

現住所	神奈川縣三浦郡逗子町櫻山二〇六三
生年月日	明治三十五年十月二十四日
入校	大正八年 海軍兵學校生徒
原籍	海軍中尉 今村武夫略歴
現住所	東京市澁谷區千駄ヶ谷四丁目八二〇
同	
生年月日	明治四十四年五月十日
入校	昭和四年四月一日 海軍兵學校生徒

### 三、天長の佳節、漢口大空襲

#### (イ) 世界史上未曾有の大空中戦

昭和十三年四月二十九日天長の佳節に當り、待望の快晴に恵まれた我が海軍航空部隊は、その〇〇機及〇〇機計約五十機の大編隊を以て、長驅敵の根據地漢口に對して一大空襲を決行した。



漢口は敵空軍の大根據地でもあり、防空施設の最も完備せる都市であつて、武漢一帯の要所には數十門の高角砲を備へ、その射撃術も亦侮るべからざるものがある。

當時敵は戦闘機約八十機をこの地に集中し、健氣にも全機が起ち上つて我を邀撃し、決戦を企圖したのである。

戦闘の結果は、半時間足らずの空中戦に於て、我が機隊は敵戦闘機五十一機を撃墜し、敵の再建空軍に絶望的打撃を與へたのである。

本空中戦は参加機數の大なる點に於ても、撃墜した敵機數の大なる點に於ても、支那事變開始以來のレコードであることは勿論、又實に世界史上未曾有の大空中戦であつた。敵の戦闘機は大部分E十五型及E十六型のソ聯機で、若干新型カーチス・ホークも交つてゐた。

その後の情報に依れば、本空中戦に於て、多數の優秀なる支那人操縦者が戦死を遂げた模様である。

五十機對八十機のこの空中戦に於て、寡勢克く敵機五十一機を撃墜し、而も我が被害僅かに二機といふ、殆ど信ずべからざる驚異的戰果を收め得た所以のものは、一に彼我將兵の精神力と術力との上に、兵力の多寡を超越する雲泥の相違があるからである。然し乍ら戦闘そのものは我が方にとつて決して樂なものどころではなく、全員死を決しての血戦であつたのである。殊に飛行機の性能上、〇〇機に比して航續力の小さい〇〇機が、〇〇機隊を掩護して遙々大陸の奥地に進出することだけでも、既に地の利に於て我が軍に不利なることは云ふ迄もなく、その上所謂佚を以て勞を待つ、數倍の敵戦闘機と交戦することの不利は、蓋し想像に難からざる所であらう。

この日作間眞特務少尉の率ゐる三機は最も奮戦し、その中二機は遂に亂戦中に壯烈なる最期を遂げ、作間機のみ漸く歸還し得たのであるが、この飛行機は驚く勿れ敵機銃彈百餘發、高角砲彈片二十餘發といふ、數へきれぬ程の手傷を負ひ、寧ろ歸還し得たのが奇蹟でさへあつた。而して信瀬誠司一等整備兵曹、小松智廣三等航空兵曹、久

保庭大三郎一等整備兵の三勇士は敵弾に傷つき、若鷺金原國廣一等航空兵は機上に壯烈なる戦死を遂げ、痛ましき凱旋をしたのであつた。

以てこの空中戦が如何に凄烈を極めたかと窺はれると共に、又我が飛行機そのものが如何に高度の信頼性を有するかを示し、我が製作技術の優秀なることを立證したものと謂へよう。

右の如くこの日の戦闘に於て、作間隊のみが三機の中二機迄も犠牲を拂はせられたことは、我が編隊群中に於ける同隊の占位が、偶々敵戦闘機隊の追躡攻撃に便なりしが爲であつて、群がる敵機の重圍に陥つた作間隊の悪戦苦闘は、さこそと思ひ遣らるゝが、同隊は正しく全軍に對して貴重なる牽制の役割をつとめたものであつて、その拂へる犠牲はいかにも大きくはあつたが、この間爾餘の各隊は思ふ存分の働きをして、輝かしく空襲の成果を収めることが出来たのである。戦歿勇士の英靈も以て瞑すべきである。

次項は作間機の偵察員、梶原航空兵曹長の手記であつて、當時の状況を在りの儘に書き綴つたもので、勇猛果敢なる我が空の勇士の奮戦振りを眼前に彷彿たらしむるものがあり、還らぬ荒鷺も亦いづれ劣らぬ目覺しい働きをし、安んじて君國の爲に壯烈なる最期を遂げたであらうことが偲ばれ、痛惜に堪へない。

(口) 血戦を語る梶原福松航空兵曹長の手記

去る四月二十九日午後〇時〇〇分、我等〇〇名は司令より漢陽兵工廠爆撃の命を受け、棚町少佐指揮の下に勇躍基地を出發、〇〇機の一群と合同し、爆音高く安徽、湖北の空を壓し、一路漢口に向つて西進した。誠に堂々たる強襲である。

午後三時四十分、遙か薄霧の裡に武漢三鎮の市街が見えて來た。緊密な編隊で漢陽兵工廠直上に進路を向けると、敵は各地の水も漏さぬ空襲警報によつて、豫てより待ち構へてゐたので、一齊に猛烈なる高角砲の集中砲火を浴びせて來た。砲彈炸裂の爆



漢口爆撃向我〇〇機

煙は四周を蔽ひ、爲に爆撃照準不能に陥ること屢々であつた。

午後三時四十五分爆撃は終つた。兵工廠一帯の地域は凄惨な爆撃に包まれたのが見える。今日の爆撃は確かに手應へがあつたぞと、足下の爆煙を眺めてほつと一息ついてふと後方を見ると、敵飛行機三機が火焰に包まれて墜落して行く。

今や友軍〇〇機奮戦の最中なのだ。

爆撃を終つて旋回避退したが、我小隊は旋回の外側に占位してゐた爲、他の小隊よりも若干後落した。爆撃前より前方に攻撃の機を狙つてゐた敵戦闘機の一隊は、好機乗ずべしとなし、

稍遅れて居る我小隊目掛けて猛襲を加へて來た。我も亦全銃火を以て之に應戦し、忽ちその四機を撃墜、敵機は次々と焰を吐いて落ちて行つた。

この前後より松野航空兵曹を機長とする三番機は遅れ氣味で、特に敵機の猛撃を受けて居たので、作間小隊長は之を待ち合はす爲少しく速力を緩めたが、松野機は敵約十機を相手に獅子奮迅の勢で戦つてゐるのが見えたので、速力を増して之に向はんとすれども、我も亦敵戦闘機數機と渡り合つて居るので、さう簡単に運動が出来ず、遂に亂戦中に松野機を見失つてしまつた。

最後に見た時、松野機の後方には敵戦闘機六機が喰ひ付く様に追蹶して居た。この頃友隊の飛行機に於て、武昌南方の湖面に黒煙を残して凄惨な勢で突入する飛行機を見たまさうであるが、之が恐らく松野機の最期であつたと思はれる。

一方山口兵曹を機長とする二番機は、ひつたり左後方に續行してゐたが、旋回を終つて間もなく一大轟音を聞いて振り返ると、山口機のタンクから紅蓮の焰を吐いてゐ

る。高角砲彈を受けたのである。萬事休す。山口機は最後の訣別の爲か、凄い火焰を噴きながら速力を増して我一番機の左側近く寄り添つて來た。窓越しに見ると、機長の山口一等航空兵曹は莞爾と笑つて手を振つてゐる。操縦員の布田兵曹はスロットル・レバーに手を掛けて操縦に専念してゐる。白石航空兵は布田兵曹の肩越しに手を振つてゐる。こんな切迫した場面に於ても、同機は尙執拗に攻撃して來る敵戦闘機に對し、射撃を續けてゐる。何といふ悲壯な光景であらう。胸が込み上げて來て唯目で別れを告げるだけである。火達磨となつた二番機は一番機を行き過ぎ、少しく機首を上げたかと思ふと、忽ち胴體の中央より二つに折れ、武昌の東方に墜落して行つた。

二、三番機を失ひ單機となつた一番機に對し、敵戦闘機は集中攻撃を加へて來た。敵彈は霰のやうにがんがん機體に命中する。タンクからは瀧の如くガソリンが噴出する。一彈は機長作間特務少尉の頭部をかすめて遮風板二枚を割つて行く。敵彈の命中が餘りに激しいので射手の安否を氣遣ひ、信瀬兵曹を見に遣ると元氣で射撃してゐる

との報告である。先づ安心と思ふ間もなく、後部に劇しい命中彈の音を聞いたので、再び信瀬兵曹を派遣すると、哀れにも今迄勇敢に敵機に猛射を浴びせて居た金原航空兵が、機銃の上に打伏して居る。信瀬兵曹は金原の肩を叩いて「傷は浅い、しつかりせよ」と叫ぶと、金原はムックリ起き上つて、更に數發射撃をしたかと思ふと、再び倒れて起き上らない。その壯烈誠に鬼神を泣かしむるものがある。

信瀬兵曹は金原航空兵を引上げ、自ら血に染つてゐる機銃に就て射撃を再興した。息をつく暇もなく、射手小松兵曹は二箇所に重傷を負うて倒れ、久保庭整備兵も續いて顔面に重傷を負うた。自分は早速久保庭に代つて前方銃架に飛びつき、射撃を再興しようとしたが、敵彈は彈倉諸共機銃を通して使用に堪へない。已むを得ず後方に飛んで行つた。敵彈は更に雨霰と降注ぎ、銃架に彈を受けて旋回不能となつたが、應急修理を加へて兎に角射撃することが出來た。然し之も亦間もなく敵彈の爲尾栓を破損し、射撃不能に陥つた。

敵戦闘機は尙も執拗に猛襲を加へて来る。今や頼りとする機銃は一つしかない。敵は之を覺ると益々肉薄するに違ひないと思つたので、暫く彈丸の出ない銃身を振り廻してゐたが、不圖氣付くと側に拳銃があるので、之を機銃と平行に構へて、三十米に肉薄して来る敵機に對し忽ち全彈を撃ち盡した。

紺青色の敵機の兩翼には、青天白日旗のマークが鮮かに浮き上つて見える。我に完全なる機銃あらば一撃の下に撃墜せんものをと、切齒扼腕すれど最早致し方ない。

死するならば持場の席で死なんものと思ひ、前方に行きかけると、若武者金原航空兵が安らかに眠るが如く戦死してゐる。去るに忍びず如何にせんかと思案したが、施す術もないので、僅に死者の兩手を合掌せしめて席に歸つた。この頃敵戦闘機は彈丸を撃ち盡したのか攻撃を止めて、全部引揚げた模様である。

席に歸つて見ると、爆撃照準孔から逆流して機体内に浸入するガソリンの爲、呼吸困難である。この儘では操縦者が倒れるかも知れぬと思ひ、手袋を脱いで孔を塞がう

としたが、ガソリンの飛沫は口や鼻に入つて精神朦朧となる。換氣を良くする爲、窓硝子を破らうとするが仲々破れない。

後方を眺めると、頭部に負傷せる信瀬兵曹と、顔面に重傷せる久保庭整備兵は、血塗れになつて集合タンクを修理して居る。小松兵曹は顔と足とに重傷を負ひ、足は血止を施したが顔面の出血が甚だしいので、取敢へず消毒綿を丸めて傷口に挿入した。

前方操縦席を見ると、ガソリンに息詰る中で、默然と操縦に専念してゐる小隊長作間特務少尉の姿が、神々しい迄に感ぜられる。

敵戦闘機が避退したので安心したものゝ、全ガソリン・タンクを破壊せられ、搭乗發動機員の死力を盡す應急處置もその效なく、ガソリンは瀧の如く噴出するので、基地迄數百軒を歸り得るや否や、非常に心配である。小隊長は信瀬兵曹に、「燃料はどうか」と叫び、信瀬兵曹は「大丈夫です」と答へる。この問答が三度繰返された。返答次第に依つては最後の決心をせなければならぬ、小隊長の氣持は悲壯である。

重傷者小松兵曹は出血甚だしく、鼻口より血を噴き呼吸困難に見える。消毒綿を取つて鼻口を拭つてやると、口の利けない彼は筆談で、「○○前進基地に着陸して下さい」と頼むので、小隊長に諮ると、小隊長は「○○には醫者が無いから、基地に歸る方がよい」と云はれた。基地迄は尙四十五分を要するが、之を告ぐるに忍びず、只「後十五分だ、元氣を出せ」と激勵した。

快速を誇る○○機も牛歩の如く感じつゝ、午後五時十五分、漸く基地に辿りついたが、敵彈の爲車輪が一個パンクして居るので、着陸時轉覆することを慮り、拳銃で他方の車輪をパンクせしめ、無事着陸することが出来た。着陸すると顔面血に塗れた信濃兵曹が来て、「今日歸れたのは全く奇蹟ですね」と云つたが、自分も同じ感じである。小隊長作間特務少尉は自機の危険を顧みず、最後迄三番機の行方を心配してゐた。然し三番機は遂に歸つて來なかつた。

歸つてから爾餘の各隊の輝かしい戦果を聞いて、我隊の拂つた犠牲の無駄でなかつ

たことを知り、遙かに天を仰いで還らぬ戦友の英魂にこのことを告げた。同時に無残にも傷ついた愛機を撫でて、今更にその信頼性に感謝したのであつた。

#### 四、海の荒鷲生還記

##### 不時着機とジャンク群との交戦

昭和十三年四月十三日、我が海軍航空隊は廣東方面、天河、白雲、從化飛行場等を空襲、その格納庫、倉庫、滑走路等を爆破し、敵に多大の損害を與へたが、この日事變開始以來初めて、敵のグロスター・グラヂエーター型二十數機と相見え、壯烈なる空中戦を演じて、その十五機を確實に撃墜した。

左記は當日廣東上空に於て、敵地上砲火を受けて機關に故障を生じ、珠江の江口に不時着した我が一機が、群がるジャンクの包圍攻撃に遭ひ、之と惡戦苦闘、遂に奇蹟的生還を遂げた時の搭乗員手記であつて、當時の凄慘なる光景を眼前に彷彿たらしむ

ると共に、一面平和的假面を装へる支那沿岸ジャンク竝に漁船群の非道振りを暴露し、又所謂無防備都市、廣東防空陣の鐵壁を如實に物語るものであるといへよう。

奇蹟的生還記

海軍三等航空兵曹 田 中 寅 彦

海軍一等航空兵 勝 見 一

(後海軍三等航空兵曹に昇進)

四月十三日、廣東空襲の命を受けた我が空襲部隊は、西原(晃)大尉指揮の下に、〇機、〇〇機を以て、敵G型戦闘機隊の根據地と聞ゆる白雲、天河飛行場を衝いて、地上に屯するものは之を空爆粉碎し、天翔るものは之を悉く撃墜して、一舉に敵を殲滅してくれようと、勇躍〇〇を發進した。

爽かな初夏の空は一碧玲瓏、大地は新緑に輝き、愛機を包む南海四月の大氣は、珍らしくも清澄爽快、今日こそは眞に絶好の空襲日和だ。

大型爆弾をシツカと抱いた各機は、機翼を連ねて猛鷲の羽搏き物凄く、一路快翔を續けた。

やがて廣東上空に達すると、例の通り市の内外到る所から、物凄い防空砲火が一齊に開かれ、高角砲弾炸裂に依る爆煙が、恰も幕を引くやうに絶間なく前程に立籠る。

ダン！ダン！ダン！と直ぐ機の側で炸裂して火を吐く砲弾。

シユツ！シユツ！と頬を掠めて飛び散る弾片。

この彈幕を突破しつゝ、獲物を求めて驀進する我が機隊。

街の東北方に目指す天河飛行場が見える。而も大型格納庫が三棟、最後の運命を待つてゐるかのやうに悄然と立つてゐる。

忽ち指揮官から「爆撃開始」の命令が下つた。得たりと機首をグツと下げて急降下！照準器を通して見ゆるは唯目標のみ、他には何物も見えなければ聞えもしない。我が命にかけたこの一發！

「一念無雜のこの境地こそは、正に那須與市扇の的の場面に等しい。我等の魂の「用意打テ」投下把柄を無心に引いた。その刹那爆弾は愛機を離れた。我等の魂の



曹兵空航等三兩の見勝・中田

乗移つた爆弾は、見事弾道を描いて目標に命中、サツと閃く炸裂の閃火、轟然たる一大爆音と共に、モクモクと湧上る爆煙、屋根が飛び、人が舞上る、忽ち見る紅蓮の焰！思はず「萬歳」と叫べば、僚友も莞爾として之に應へる。

この時サツと腦裏に閃いたものは、今日出發に際して、「成功を祈る」と言はれたあの〇〇部隊長のお顔！

そして「やりました」と答へ得る嬉しさである。

だが、この嬉しさ、この任務を全うし得た場合にのみ味ひ得る尊き法悦に浸らんとしたその瞬間、その刹那であつた。

「ダン！ダン！ダン！」と、愛機は續けざまに猛烈な敵弾を受けた。

「バアーツ、バアーツ！」と、エンジンは黒煙を吐くと共に、操縦席前方の硝子板も飛行眼鏡も、眞黒に塗りつぶされてしまつた。エンジンからの油の噴出らしい。物凄い震動と共に、愛機は斷雲の間を右に大きく旋回して、グツと機首を下げて眞逆様となつた。

「小癩な敵奴、やりをつたな」と思ふ間にも、機は既に墜落状態、而も操縦不能に陥つてしまつた。物凄い加速度で廣東の街へ落ちて行く。噴き出す油は胴體に尾部に、さては焼けたガスと共に操縦席を包み、呼吸すらも困難だ。

だが調べて見ると操縦装置は大丈夫だ。苦心の末、やつと愛機の旋回が止つて墜落状態を脱することが出来た。



エンジンも喘ぎ乍らではあるが回つてゐる。

「占めた！」と徐々に高度をとつたが、見渡したところ指揮官機も僚機も見えない。之から豫定集合地點へ行くことなどは思ひも寄らない。

ふと「自爆」といふことが頭に閃いたが、早まつてはならぬと、我と我心を勵まし、

〇〇に歸る覺悟を決めて針路を南にとつた。暫くすると真下に海が見えた。珠江の口に出たのだ。だがこの時突如プロペラがハタと停つた。

もはや萬事休す。高度は五〇〇米—三〇〇—二〇〇とグングン下る。機側から海面が見えるやうになつた。もうかうなつては敵前不時着あるのみだ。勝見一空は悲壯なる決心を面に現して、最後の通信とばかり、無電のキイを握つた。

「用意はいいか」「宜しい」

ザ、ザ、ザ、と前車輪が水を切る。軽いショックで愛機は機首を海中に突込んだ。

落着きが第一だ。上下が分らぬ狼狽は禁物。バンドを取つてポカリ海面に浮き上つた。深呼吸をする。僚友も微傷も負はず浮いてゐる。愛機は後部上方を水面に出して突立つてゐる。

こゝは海上だとはいへ敵前である。

「機銃を卸せ、弾倉を外せ」と、先づ戦闘の準備おさおさ怠りなく、次いで救命筏を取出して空氣を入れ、愛機沈没後の處置をした。後は唯天命を待つばかりである。時に零時四十分。

やがて遙か陸岸近くに蟠集してゐたジャンクが、次々に帆を上げて徐々に動き出した。何れも我方に次第に接近して来る。そして五十米位離れた所まで来て停止したのもあり、その邊を往復してゐるものもあり、どうやらこちらの様子を探つてゐるやうであつた。愛機の上で二人は萬一に備へて應戦の用意をしてゐた。

こちらでは警戒はし乍らも、相手は漁民だし、何か魚でもとつてゐるのだらうと思

つてゐると、間もなく猛烈に機關銃を打出した。

さては武装ジャンクであつたのか、愛機の二、三米前方に盛に水煙が立つ。ビューン、ビューンと頭上を掠め、愛機の胴體をブスブス貫く弾もある。

「何を生意氣なジャンク奴」と怒髪天を衝き、「さあ来い」と應戦した。だが何一つ蔭蔽物のない波上、愛機は波に揺られて足場が悪く、ともすれば二人は海中に落ちさうになる。機銃は重くて照準が出来ない。

「えい、まゝよ」と身を敵弾に曝し乍ら、自分の肩に銃身を擔いで照準を助け、勝見一空兵が引金を引く。

ダ、ダ、と快い震動と共に銃口は火を吐き、赤い曳痕弾は惜いジャンクの胴體に吸込まれるやうに命中する。バタリ、バタリと瞬く間に六、七名を倒した。敵は思はぬ猛撃に驚いたらしく、忽ち逃走した。

「腰抜けのチャンキー奴、思ひ知つたか」と、勝見一空と顔見合せて破顔一笑した。

この交戦で愛機は胴體に八弾を被つた。

だが一旦退却したジャンク群は、又復数を倍加して、今度は四十數隻が包圍隊形をとつて三方から進んで来た。

戦さは機先を制するに如かずと、今度はこちらから打出した。ジャンク群右端の指揮船らしいのが、先端に小さな吹流しのやうなものを附けた棒を左右に振つて、合圖をすると、忽ち三方の船群から亂射亂撃を開始した。水煙は無數に立ち、飛行機は數十發の敵弾を浴びて蜂の巢のやうになり、尾部は見る見る中に粉碎されて了つた。

かうなると人間は却つて落着いて来る。こちらも前回の戦法で、射つて、射つて、射ちまくつた。銃身が焼けて手で握れなくなり、襦袢を海水に浸して銃身を冷し乍ら應戦を續けた。だが残弾はもはや残り少くなつた。

この交戦で弾を射ち盡したら最後だ。二、三發宛に、儉約して發射しなければならぬ。しかし二人共決してひるんではゐない。幸なことには、天佑か、神助か、それとも

敵の射撃がよくよく下手なのか、身邊を掠める無数の敵弾も一發も命中しない。この間こちらは相當に敵を倒してゐる。この時不思議に西方に當つて、なつかしい飛行機の爆音が聞えて來た。遙かに勇ましい我が〇〇機四機が、北上するのが見えた。

この飛行機の爆音が聞えて來ると、彼等は餘程恐ろしいと見えて、忽ちジャンク群は四散してしまつた。

二人は初めて我にかへると、急に睡氣を催して來た。だが今眠れば最後だと、お互に勵まし合ひつゝ、大きな聲を張上げて、軍歌を歌つたが、それも聲がかれて長くは續かなかつた。

もう不時着してから三時間になる。九分通り救助されることも絶望だと思ふと、一層のことあの時自爆すればよかつたと、今度こそはいよいよ覺悟を固めた。今退却したジャンク共が、更に兵力を増して來襲することは必定。

「ヨーシッ！」その時射つて、射つて、射ちまくつて、最後の一發と共に、潔く南海

の藻屑と消えよう。

二人は悲壯なる決意をして邊りを片付け、重要書類を處分し、敵弾で裂けた愛機の胴體を破つて中に這入り、今迄の經過をあらまし書綴り、最後に 天皇陛下萬歳と連名で書記した。

もう何も思ひ残すことはない。死して護國の鬼となるは我々の本望だ。そして再び生れ變つて敵を討たう。

「もう四時過だが、あと一時間待つことにしよう。五時迄が我々の生涯だ」と二人は相談した。

その時、俄然海のさ中に、唯二人きりの静寂を破つて、飛行機の爆音が聞えて來た。音は段々大きくなる。

あゝ、なつかしい我が僚機だ。

忽ち頭上に来て一旋回、二旋回、おゝ頭上から僚友が手を振つてゐるではないか。

次いで見事に着水して、我々に近づいて来る。翼端に搭乗員が出て来た。

あゝなつかしい我が空の勇士よ、日の丸の翼よ、二人は直ぐ何よりも先づ機銃を抱いて浮舟を傳はり、救助機上に這上つた。

機上米原大尉と、青木一空曹の日焼けした童顔に迎へられた時、思はず熱い涙が我等二人の頬を傳はつて流れた。

水を蹴立て、飛行機は滑水を始めた。だが愛機は未だ浮いてゐる。この儘ではむざむざ敵手に渡るから、どうしても沈めなければならぬ。米原機は滑走中、我が愛機に機銃の猛撃を浴びせた。

見る見る愛機の胴體は裂けて沈んで行つた。

「あゝ愛機よ、さらば、これまで生死を共にした愛機よ、さらば」二人は沈痛な感激に打たれつゝ、沈みゆく愛機を見守つた。

やがて米原機は離水して〇〇に向かつた。

かくて我等は〇〇から、月明の洋上を駆逐艦〇〇に便乗して、無事〇〇に歸還することが出来た。

思へば今日の半日は全く夢のやうな気がする。

人間は運命に依て左右されるのだ。だがその運命を開拓して行くのは一に精神力だ。今日奇蹟にも生還し得たことは、尙我々にこの世で爲さねばならぬ重大な任務が残されてゐるからである。

ヨシ！さらば、今日得た数々の得難き教訓を活用して、いよいよ一死奉公を誓ひ、命のあらん限り勇戦奮闘しよう。

### 海軍大尉 西原 晃略歴

原籍

山口縣宇部市大字中宇部二番地ノ第三

現住所

水戸市沖町

生年月日

明治四十三年一月十五日

入 校 昭和二年四月八日 海軍兵學校生徒  
現官任用 昭和十一年十二月一日 任海軍大尉

海軍大尉 米原綱明略歴

原 籍 山口縣佐波郡右田村大字上右田一八九  
現住所 同

生年月日 明治四十三年二月十一日

入 校 昭和二年四月八日 海軍兵學校生徒

現官任用 昭和十一年十二月一日 任海軍大尉

海軍三等航空兵曹 田中寅彦略歴

原 籍 熊本縣玉名郡神尾村大字太田黒一五七二番地

生年月日 大正五年二月十六日

入 團 昭和八年五月一日

現官任用 昭和十二年十一月一日 任海軍三等航空兵曹

海軍三等航空兵曹 勝見一略歴

原 籍 佐賀縣唐津市大字唐津五六六番地

生年月日 大正七年七月二十四日

入 團 昭和九年六月一日  
現官任用 昭和十三年五月一日 任海軍三等航空兵曹



五、一騎當千の上海陸戦隊、廣中路の激戦

上海戦闘は、昭和十二年八月十三日午前十時三十分、商務印書館に據れる支那兵の我が哨兵線に對する機銃射撃を發端とし、同日午後四時五十五分、我が陸戦隊本部に對する大砲射撃に依つて、遂に火蓋が切られた。

大川内陸戦隊司令官から直に「全軍警戒、戦闘を開始せよ」との命下るや、激戦は先づ八字橋方面に展開せられた。

敵が當初企圖した所は、勿論我が居留民の最も多い、虹口方面の突破にあつたのであるが、市街戦にかけては最早や素人ではない我が陸戦隊を對手に、大兵力の運用に適しないこの方面の戦闘は、支那側にとつて却つて不利であることを覺つたものゝ如

く、敵は先づ我が西北の突角部、八字橋方面に最初の攻撃目標を選んだのであつた。ところが、この方面にあつた濱脇兵曹長指揮下の僅か三ヶ分隊の反撃の爲に、三ヶ分隊に餘る敵包圍軍は撃退せられ、我が砲隊、戦車隊等も之に協力し、敵の再三、再四の逆襲を撃退したので、敵はこの方面の奪取を断念し、更に増援部隊を加へた八十八師の主力約一萬を以て、北方に方向を轉じて、八月十六日午前一時頃から、廣中路方面に潮の如く殺到して來た。その勢ひは實に凄まじいものがあつた。

當時廣中路方面の守備に任じてゐたのは、橋本少佐の指揮する僅か二五〇名ばかりの兵力で、而もこの兵力を以て三料の正面を受持つてゐたのであるから、要所要所に一、二ヶ分隊宛を配備してゐた状況であつた。だから我方はどの陣地も、どの陣地も、中隊以上の敵に包圍されることになつた。我方は援兵は勿論皆無、彈藥糧食の補給すら出來ないやうな窮地に陥り、眞に我が陸戦隊は文字通り危機に瀕したのである。従つてこの廣中路の激戦は、戦況最も慘烈を極め、幾多壯烈鬼神を泣かしむる陣中

美談を産んだことは勿論、又この戦ひは實に乘るか反るかの、所謂天下分目の戦ひでもあつたのであつて、萬一この戦ひに不利であつたとしたら、爾後上海方面に於ける戦闘は、之までとは異つた経路をとり、従つて戦局全般の進展に對しても、重大なる結果を招來したであらうことが想像せられるのである。本戦闘に於ける幾多の陣中美談は、既に前輯迄の「輝く忠誠」に一部記載されてゐるものもあるが、尙その後得た資料に依つて、左に之を追補することとする。

(イ) 貴志中隊長の壯烈なる戦死

貴志部隊は今次事變の尊き犠牲者、大山大尉を出した部隊である。「大山大尉の弔合戦だ！」と、全員復讐の一念に燃えて勇氣百倍、廣中路の我が陣地に一萬の敵大軍を邀へて勇戦力闘、惡戦苦闘を續けてゐたが、一人倒れ、二人倒れ、我が第一線の兵力は次第に減つていつた。而も全線手一杯の戦をしてゐるので、援兵などはありやうがない。

この時中隊本部に在つた貴志中隊長は、本部の指揮を海軍三等兵曹牧野喜一郎に委ね、自ら手兵二ヶ分隊を率ゐて前線に進出、陣頭に立つて奮闘し、手負ひの諸兵亦死力を盡して敵を痛撃、爲にさすがの敵大軍に動搖の兆が見えた。貴志中尉(後大尉)が



貴志海軍大尉

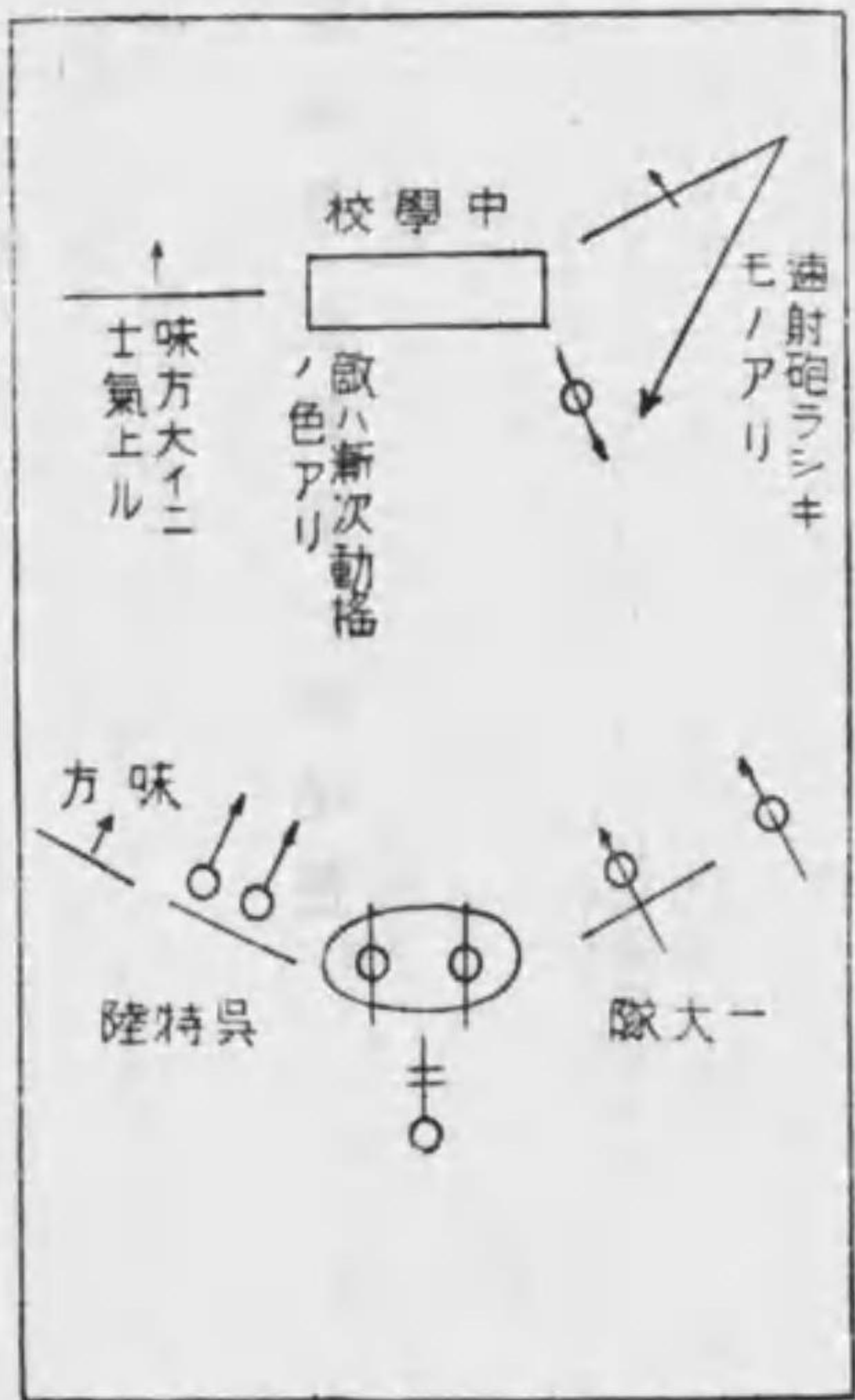
何で之を見逃さう。機は熟せりと、直に自ら手兵を提げ、日本刀を振つて敵陣に突撃、當るを幸ひ斬り倒し、薙ぎ倒し、獅子奮迅の働きに、群がる敵を蹴散らしてゐたが、偶々敵の一弾は中尉の鐵兜を貫き、無念中隊長はこゝに壯烈なる戦死を遂げた。時に十六日午前八時半。

一方中隊本部の指揮を委ねられた牧野兵曹は、海軍一等水兵大森弘、同井崎庄一、同井出春美の三名を指揮して、各陣地間の連絡、竝に彈藥補給に當つてゐたが、敵彈は數發本部に落下し、次いで敵の大軍は雪崩を打つて殺到し、中隊本部は瞬く間に敵の包圍に陥つてしまつた。だが重大任務を帯びた牧野兵曹は、悲壯なる決意を固め、

右手に手榴彈、左手に電話機を握つて死闘一時間餘、敵大軍の重圍の中にあつて、而も中隊長戦死後の困難なる情況の下にあつて、沈着に彈藥配給、通信連絡等の要務を處理し、克く中隊の指揮連絡に遺憾なからしめたのであつた。

かくて、中隊本部を指揮せよとの貴志中隊長の命令は、遺憾なく見事に遂行せられたのである。

凸版は戦火の中に立つて記した「貴志中隊長報告圖寫」で、之が遂に中尉の絶筆となつたものである。



貴志中隊長報告圖寫

海軍大尉 貴志 金 吾 略 歴

和歌山縣海草郡湊村字湊二六八九

同

明治四十四年六月四日

昭和五年四月一日 海軍兵學校生徒

昭和十二年八月十六日 任海軍大尉

海軍三等兵曹 牧野喜一郎 略 歴

埼玉縣北足立郡大和田町大字大和田八三九番地ノ一

安 宅

大正元年十二月十七日

昭和七年六月一日入團、昭和八年十一月七日砲術學校入校

昭和十二年五月一日

原 籍	現住所	生年月日	入 校	現官任用
原 籍	現住所	生年月日	入 校	現官任用

(口) 豪勇無双の園畑兵曹長とその部下

小隊長海軍兵曹長 園畑 嘉太郎(佐鎮)

八月十六日、園畑兵曹長は所屬大隊の中堅陣地たる、廣中路西端陣地及びその右翼銃隊を指揮して奮戦中であつたが、同日午前六時二十分頃、敵の大部隊が粵東中學方面から、起伏地や棉畑を利用して我が陣地に肉薄して來た。

園畑小隊長は部下の半数既に倒れ、この儘では陣地の確保困難と覺悟し、直に右翼機銃陣地に命じて正面の敵を猛射せしめ、左翼機銃員のみを陣地に殘し、自ら手兵二十名を提げて陣頭に立ち、日本刀を揮つて左方より敵の側背に向かつて突撃を決行、約五十名の敵中に跳込み、手榴弾を浴びせつゝ、斬り倒し、刺し殺し、遂に敵を全滅して機銃陣地を奪取した。

この時のことである。園畑兵曹長は「此野郎、此野郎と云つて、敵十七人ばかりを斬つたが、後は覺えてゐない」と述懐してゐる。

又この時、小隊長傳令として、常に小隊長の身邊を守つて奮戦してゐた、兼田兼成(佐鎮)一等水兵(後三等兵曹)は、敵手榴弾の爲、右腕首を打碎かれたが、毫も之に屈



せず、短機銃を以て力戦格闘を續けてゐた。だが短機銃では格闘に物足らずと、倒れた戦友の小銃を把つて、右腕が利かないので銃の床尾を右小腕に挟み、左手を添へて、群がる敵中に躍込み、獅子奮迅の格闘を續けたが、この頃既に無数の敵弾を受けてゐたので、さすがに鬼神の如き勇者も今は力盡き果て、「萬歳」と叫んで壯烈なる最期を遂げた。

又吉原一等水兵(後三等兵曹)は、敵を小銃の臺尻尾で打斃し、臺尻尾が折れるや、之を繃帯で巻き止め、更に力闘を續けてゐたが、遂に壯烈なる戦死を遂げた。

かくて當面の敵數十名は全滅させたが、次いで粵東中學、大華農園附近の堆土から集中火を浴びせられる敵と應戦中、第〇戦隊陸戦隊甲斐小隊、中田小隊の應援を得て敵を撃退した。

甲斐少尉は奮戦中、午前九時十七分、敵砲彈の爲壯烈なる戦死を遂げた。

又この時、敵突撃部隊の前方に我を猛射する機銃を認め分隊下士官、海軍二等兵

曹(後海軍一等兵曹)高橋慶作は、憤然銃剣突撃に移り、矢庭に敵の射手を刺殺し、その他の銃手を蹴散らして、その機銃を奪ひ取り、直に敗走する敵方に銃口を向けて猛射を浴びせかけ、敵に多大の損害を與へた。だが高橋兵曹はこの時、既に身に數多の銃創を受けてゐたので、遂にその場に壯烈なる戦死を遂げた。斃れて後已むとは、眞に高橋兵曹に就て云ふべき言葉である。

かやうに苦戦を續けてゐる中に、午前八時半頃には貴志中隊長が戦死を遂げ、次いで甲斐少尉も戦死し、園畑小隊も残員僅か十數名となつたが、小隊長は常に陣頭に立つて勇戦奮闘を續け、遂に克く陣地を死守し、敵をして一步も廣中路に入れしめず、爾後の我が作戦を有利に導いたのである。

尙園畑兵曹長は翌十七日には、射的場北端守備の任務を果して偉功を立て、九月十三日には江灣沙涇クリーク交叉點に於て戦闘に従事してゐたが、翌十四日北部支隊總出撃の準備として、大隊正面の敵情偵察を命ぜられ、午後二時將校斥候となつて部下

十名を率ゐて出發、時餘の後歸還して、正確且つ詳細なる敵情を報告した。

次いで自ら偵知した敵情に基き、中隊本部北方約三百米の敵森林陣地を、その守兵少きに乗じて急速に占領し、この陣地に據つて、敵の堅陣愛國女學校の側面攻撃を敢行すべく、直に陣地の構築に取りかゝつたところ、之を感知した敵は俄然猛攻撃を開始し、敵弾は頻に我が陣地に落下した。

然し園畑兵曹長は、この地を確保しなければ明日の出撃に大困難を來すことになるとして、部下を激勵して防戦に、工事に、必死の奮闘を續けてゐた時、偶々飛來した敵手榴彈が小隊長の身邊に轟然炸裂し、園畑兵曹長は左上肢に重傷を負つた。然し豪勇無双の兵曹長は些しも動ずる色なく、いよいよ部下を叱咤して指揮を續け、どうしても後送を肯かない。中隊長から「必ずこの陣地は死守するから安心して退れ」と半ば命令するが如く諭されて、漸く納得して後退したのであつたが、後送の瞬時迄部下を激勵して止まず、爲に全員の士氣愈々昂り、深夜豪雨中にこの難工事を完成して、敵

の側面に猛撃を加へ、翌十四日支隊總出撃成功の基を成したのであつた。  
右の如き園畑兵曹長の拔群の働きは、一に兵曹長平素の修養と、武道鍛鍊の賜であると言はれてゐる。

### 海軍兵曹長 園畑嘉太郎略歴

鹿兒島縣始良郡日當山村朝日九四

同

現住所 明治三十六年十一月十一日

生年月日 大正十年六月一日 佐世保海兵團

入 團 昭和十年十一月一日

現官任用

### 海軍一等兵曹 高橋慶作略歴

原籍 新潟縣南蒲原郡井栗村大字塚野目一六一四番地

生年月日 明治四十五年四月十八日

入 團 昭和五年六月一日入團、昭和六年十一月十六日砲術學校入校

現官任用 昭和十二年八月十六日

海軍三等兵曹 吉原勝志略歴

鹿兒島縣川邊郡西南方村泊四七〇

同

原籍  
現住所

明治四十四年一月五日

生年月日

昭和七年六月三十日 佐世保海兵團

入團

昭和十二年八月十六日

現官任用

海軍三等兵曹 兼 田兼成略歴

長崎縣南高來郡深江村戊九〇九

原籍

現住所

大正二年六月十五日

生年月日

昭和八年一月十日 佐世保海兵團

入團

昭和十二年八月十六日

現官任用

(八) 勝村特務少尉とその部下の奮闘

小隊長海軍特務少尉 勝村 懿 德(佐鎮)

八月十六日、勝村小隊長は北部地區最尖端、西體育會路上の北ノ橋及び開林公司の兩陣地を指揮し、幾度か敵大軍の襲撃を撃退し、特に午前四時頃猛烈を極めた敵の襲撃に對して、我が戦車隊と協力して痛烈なる反撃を加へ、完膚なき迄に敵をやつつけた。之が爲敵は進路を南に變へ、當時僅か一ヶ分隊を以て死守せる我が油公司陣地に殺到した。之を見た小隊長は機を失せず、敵の側面より猛撃を加へ、江灣路に進出せんとする敵の企圖を挫き、我が東北方の咽喉部を完全に確保した。

この日、勝村小隊長は夙に敵の襲撃を察知し、部下に對して「今夜は敵總攻撃の兆がある。各員最後の一人となる迄奮戦して、この陣地を死守せよ」と命令した。全員意氣軒昂、「何時でも大敵御參なれ」と待ち構へた。果せる哉、午前零時五十六分、敵は大舉して總攻撃に轉じ、信號火箭を合圖に猛烈な砲撃、銃撃を開始して來た。砲弾は附近に炸裂し、機銃弾は火を曳いて霞の如く飛び來る。

この時敵は小瘡にも、我が陣地を奪取せんものと、左側家屋に寄添うて突撃を敢行

して來た。之を見た分隊下士山本兵曹は、ヂツと敵を間近に引寄せて、頃はよしと、信國吉政の名刀を以て、抜く手も見せずバツサリと斬り伏せた。

一方、輕機銃射手井上一水は、見事な雜射を以て、續く敵兵を片ツ端から雜倒し、見る間に數十名を射殺した。寡兵なりと雖も、我が忠勇義烈なる勇士には抗し得ず、さしもの敵大軍も三時間に互る激戦の後、多數の死體を残して敗退した。

その頃敵の一彈我が陣地に命中し、土囊は飛び、機銃は破壊され、死傷者續出、慘状目も當てられず、敵はこの勢に乗じて益々肉薄し、手榴彈を投じ、勝村小隊長も負傷するに至つたが、重傷の部下を勞はつて後退させ、「皆の仇は必ず討つてやるから安心して治療せよ、癒つたらまた陣地へ來い」と叫び乍ら、自らの負傷にも屈せず、機銃射手となつたり、或は僅かに残る數名の部下を勵まして、砲煙彈雨の中に土囊を積み重ねたりして勇戦奮闘を續け、遂に克く陣地を守り通したのであつた。眞に豪勇沈着、部下思ひの小隊長として、隊員一同から尊敬信頼の的となつた。

尙勝村小隊長は、その後の戦闘に於ても數々の偉勳を立てた。

即ち、九月十九日には將校斥候として部下十一名を率ゐ、或は敵陣地を破壊し、或は敵の占據せる家屋を焼打ちする等、大膽不敵なる強行偵察を敢行し、西體育會路、商學院及び以西の敵陣地攻撃に對し、友軍を利するところ甚大なるものがあつた。

又十月二十五日、商學院攻撃に際しては、自ら陣頭に立つて部下を勵まし、山出小隊と協力して常に機先を制し、頑敵數次の逆襲を退けて、遂に敵の商學院奪回の企圖を放棄せしめたのである。その他小隊長として終始中隊長を補佐し、我が作戰に寄與する所大なるものがあつた。

## (二) 油公司の肉彈戰

竹邊兵曹外八名、頑敵を撃破

海軍一等兵曹 竹邊幸太郎(佐鎮)

海軍一等水兵 橋本積夫(横鎮)

同 田崎陸奥(佐鎮)

同 前田正一(同)

同 長澤榮太郎(横鎮)

海軍二等水兵 根本貞男(同)

同 境典保(佐鎮)

海軍三等水兵 嶋口敏幸(同)

同 眞部常一(同)

油公司是八月十四日拂曉を期し、勝村小隊長を先頭に、その部下七名の勇士に依つて占領せられた。爾來前記竹邊兵曹外八名の寡兵を以て、之が守備に任じてゐたのであつた。

然るに十六日午前六時、突如約二百名の敵が前方家屋の階上及び森林地帯から、機銃

數挺を以て、一齊に我が陣地に猛射を浴びせかけて來た。

竹邊兵曹は直に重機、輕機を以て應戦し、自らは彈着を觀測しつゝ、部下を指揮してゐたが、彈藥運搬中の眞部三水、先づ傷ついて戦線を退ると間もなく、敵は總攻撃に轉じ、雪崩を打つて我が陣地に殺到して來た。

この時竹邊兵曹は、「機銃は屋上より地上に殺到する敵兵を猛射せよ」と叱咤しつゝ、自ら六名を指揮して機銃、手榴彈等を以て二階、三階の敵を掃射すると共に、眼下に迫る敵突撃部隊に猛射を浴びせかけた。敵はバタバタと將基倒しに折重なつて仆れる。

然し敵もさるもの、尙も屈せず屍を越えて、我が左翼伊藤部隊を突破した。

竹邊兵曹は直に境三水、嶋口三水を傳令として本部に急派、戦況を報告せしめた。

この頃、右翼山本分隊も敵の側射を受けて、殆ど全滅の悲運に陥つた。

今や左右兩陣地を突破した敵は、破竹の勢を以て押寄せ、遂に油公司を包圍するに

至つた。

友隊間の通信連絡は断たれて、全く孤立無援に陥つた。敵は既に屋内に侵入して来た。

この時、階段守備に當つてゐた田崎一水が、輕機銃を構へて階段を下りかけると、敵も階上に向かつて威嚇射撃をしながら、階段に詰寄せて来た。

田崎一水は輕機銃を以てこの敵を撃退すると共に、長澤一水、根本二水に命じて、附近にある机、腰掛、油罐、空箱等を投げつけさせて階段を封鎖した上、全員必死の攻撃に移り、窓から手榴弾の雨を降らした。

然し敵も亦窓から手榴弾を投込んで來るので、その破片や、器物や、煉瓦などが飛散し、硝煙濛々と室内に渦巻いて凄惨を極めた。

この間、竹邊兵曹は陣中を縦横に馳驅し、獅子奮迅指揮に當つた。屋上陣地では敵の迫撃砲彈の爲、土囊も吹き飛ばされると云ふ慘澹たる状況の下に在つて、機銃射

手橋本一水、前田一水は、毅然として勇猛沈着に敵機銃と交戦を続け、遂に之を粉碎した。

かくて僅か九名を以て敵大軍と交戦すること二時間、やがて榊谷部隊の來援を得て敵を殲滅し、遂に同陣地を完全に確保したのであつた。

この間消耗手榴弾七十個に及び、いかに戦闘の激烈であつたかと窺はれるのである。一騎當千とは正に之等勇士のことを謂ふのである。

#### (木) 山田特務少尉の奮戦

「もう一發撃たしてくれ」と奥山一水の壯烈なる最期

小隊長海軍特務少尉山田富士三(佐鎮)は、開戦以來部下二ヶ分隊を率ゐ、北部戦線陣地を守備し、不眠不休の戦闘を續けてゐたが、八月十六日、所謂廣中路の激戦に於て、隣接せる園畑小隊が進撃するや、之と呼應して直に敵に肉薄し、敵と三十米に

對峙して猛烈なる白兵戦を演じた。

この時奥山一等水兵の如きは戦死に臨み、「もう一發撃たしてくれ」と戦友に告げ、與へられた一發を最後の氣力を以て發射し、莞爾として死に就いたのであつた。

かくて山田小隊は激戦七時間に及び、數多の尊き犠牲を拂つたが、見事敵を撃退した後、命に依つて後退した。後退に際し山田小隊長は、部下を一名宛匐匍して退かすめ、自らは最後にこの陣地を引揚げたのであつた。

爾後の戦鬪に於ても、山田特務少尉は常に中隊長を補佐して、數々の偉勳を立てたが、十月二十五日商學院占領に際して、白刃を揮つて突撃を執行し、一番乗りをしたのも山田小隊であつた。そしてその後、敵の執拗なる累次の逆襲を撃退して、この陣地を死守したのである。

海軍特務少尉 山田 富士三略歴

原籍

佐賀縣西松浦郡東山代村大字大久保四五六

現住所

同

生年月日

明治三十一年五月十二日

入團

大正六年六月一日 佐世保海兵團

現官任用

昭和十一年十二月一日

(へ) 白衣の勇士が語る廣中路の血戦

(一) 鮮血淋漓、傳令に従事した岡崎一水

上海戦が開始せられた直後、敵が大舉して中央突破を試みた廣中路の激戦は、我が寡勢なる陸戦隊にとつて、實に乘るか反るかの天下分目の戦鬪であつた。

海軍一等水兵岡崎梅夫は、あの有名な闇畑(嘉太郎兵曹長)小隊に屬し、八月十六日、彼の上海廣中路の激戦に参加して、重傷を負うた勇士であつて、敵彈の爲に右手首を貫通され、尙手榴彈の爲に右足を打碎かれて鮮血に塗れながら、中隊本部と大隊本部

に、前線の危急を報告し、折柄本部に來合はせた援隊（後で艦隊から派遣の〇〇陸戦隊と判つた）の先達をして、再び戦線に歸還の途中、多量の出血の爲遂に昏倒し、恨みを吞んで後送されるに至つたものである。



兵水等一崎岡

今岡崎一等水兵は湯の里、大分縣龜川の別府海軍病院で静かに傷を養ひながら、幸ひ満足に残つた左手だけで、一週三回のミシン教育を受けてゐるが、さすがに昔は相撲二段の猛者、見るからにガッチリとした体格の持主で、ベッドにドツシリと腰を下ろして、そのに激戦の當時を偲びながら、大きな眼を輝かして次

のやうに語つた。

「私は八月十五日の晩から明方にかけて、潜伏斥候に出て居りましたが、夜明方二

名の敵兵をチラと発見しました。薄闇を通して尙よく凝視すると、その遙か後方に當つて白壁の家を背景として、敵の大軍がクツキリと浮び上つて見えました。それが丁度我が廣中路陣地の略真正面でした。

私は直ぐ陣地に歸つて、この事を小隊長に報告しましたが、果して午前五時頃になると、約三千に餘る敵兵は逐次東の方に移動して、愛國女塾を占領し、その勢ひに乗じて猛烈な迫撃砲、機銃、曲射砲等の掩護下に、雪崩のやうに我が陣地に殺到して來て、我々を包圍しました。

敵の手榴弾隊は、昨夜から夜陰に乘じ、大豆畑を利用して我が陣地に近づき、この時眼前五米位のところ迄肉薄して來て、一齊に手榴弾攻撃を開始しました。

小隊長園畑兵曹長は直に「突撃」と叫んで、自ら陣頭に立ち、自刃を揮つて戦つて居られました。私も一人で手榴弾を五、六十發は投げたと思ひます。然し何しろ敵はとても大軍で、而も益々新手さへ加はり、我が陣地は全く敵に包圍されて死傷者續出、



我が園畑小隊は本當に全滅だと思ひました。

その頃小隊長傳令兼田(兼成)一水は既に斃れてゐたので、私は小隊長から命せられて、貴志中隊長の許に傳令に走らうとした刹那、とうとう手と足をやられました。だ  
がどんなことがあつても、中隊長に報告しなければならぬと思ひましたので、幸ひ陣  
地の附近にあつた自轉車に乗つて、夢中で中隊本部に駆けつけました。

私が本部に飛込んで、「園畑小隊全滅」と叫んで報告しますと、中隊長貴志中尉は、  
何も言はず、いきなり日本刀を引抜いて、「集まれ」と一言怒鳴られたと思ふと、其  
處にゐた七名を引具して、直ぐ飛び出して行かれました。あれが私の見た貴志中隊長  
の最後の姿でありました。

それからまた私は公園坊にあつた大隊本部へ行つて、大隊長橋本少佐に報告しまし  
た。大隊長はその時本部に一人きりで居られました。直ぐ陸戦隊本部へ電話をかけて、  
何か話して居られましたが、急いで外へ飛出して行かれました。何處へ行かれたのか

判りません。その中に陸戦隊員を乗せたトラックが三臺、本部前にやつて來ましたの  
で、それを案内して廣中路の戦線へ引返した積りでしたが、後は倒れてしまつたの  
でよく覚えて居りません。……………

相撲部員が私の外に二人居りました。あの右腕をやられたので、銃の床尾を右小脇  
に挟み、左手を添へて敵中に飛込んで行つて散々格闘した上、遂に戦死を遂げた小隊  
長傳令の兼田兼成一水と、銃が折れたので之を細帯で巻き止めて、尙も力闘した揚句  
戦死した吉原一水の二人がさうです。皆二段でした。兼田はきつと體當りをやつたの  
だらうと思ひます。……………

私は幸ひ右手をやられたので、ミシンをやるのには却つて好都合です。ミシンの右  
の方にある車は、手首から先がなくても右腕で結構廻せます。一週間に三回、先生が  
來られて教授して下さいます。その他此處では就業教育として養鶏、簿記なども教育  
されて居ります。又時々お寺の坊さんが來て、一緒に「讀經」をしてゐます。之は所

謂「安心立命」の爲になるのでせう」

かうした腕の無いもの、足の無いもの、又腕も足も両方共缺けたもの、皆これ上海戦線の尊き勇士である。折柄白樺をかけた国防婦人會の婦人達が、一人、一人、頭を下けて、臉を赤く泣き腫らしながら、勇士達の前をつゝ、

高知縣播磨郡紫村  
田南岡崎梅夫

署自のき書左

ましやかに通る。白衣の勇士亦感謝に溢れた態度を以て、一々頭を下げて挨拶してゐた。何んともいへない涙ぐましい情景であつた。

だが勇士達は飽く迄も元氣であり、明朝である。

國家の干城として、天晴れ爲すべきを爲したのだといふ、尊き法悦に輝いてゐるやうに見えた。

うに見えた。

凸版は岡崎一水が左手で書いた文字である。

(二) 機銃陣地に勇戦した田村一水

同じく八月十六日、我が廣中路陣地、園畑小隊の銃隊陣地の右端、機銃陣地に在つて勇戦奮闘、重傷を負ひ、遂に足關節を切斷するに至つた海軍一等水兵(當時は二水)田村博(和歌山縣那賀郡山崎村大字金池)は、激戦の模様を次のやうに語つた。

「敵は我が陣地の右後方に迂回して、後ろから殺到して來ました。あの時は我が陣地の土囊の所までやつて來て、圖々しくもこちらの土囊を臺にして、外側から機銃や小銃を据ゑ、我が陣地に對して側射を始めた。

私はいきなり敵の小銃、機銃を引つたくつて、二名宛二回、四人を銃殺しました。どうしたのか劍が見つからなかつたからです。矢張り銃劍はどうしても必要だと思ひ

ました。

その時でした。分隊下士の今川正明二等兵曹が突然頭を抱へて、「頭が割れた、割れた」と云つて地上に昏倒しました。敵の手榴弾が額に中つたのを、右手で攫んで投げ返したのです。

盲弾だつたのです。敵の手榴弾には非常に盲弾が多かつたやうです。若し炸裂したら本當に今村兵曹の頭は微塵に打碎かれたでせう。その中に私もやられました。もう戦線では水兵も特科兵もありません。機銃では射手以下二、三人を除いて皆特科兵です。

暗がりでは機銃の修理をすることなどは、却つて機關兵の方が上手なやうに思ひます。……………」

と、右足關節を切断された田村一等水兵は、杖をついて立つた儘、面白さうに當時の戦況を語り續けた。

## 六、「死なして下さい」と血書出願

### 念願叶つて名譽の戦死

○月○日の午前三時、横須賀港務部分隊長、長岡特務大尉の部屋をノックするものがある。○○方面派遣部隊の人選や、その出發準備に終日忙殺されて綿の様に疲れ切つた分隊長は、已むなく起き上つて深夜の來訪者を招き入れた。見れば昨日來再三、再四一出征部隊に加へて下さい」と、哀願を續けて手こずらせてゐた、部下の一等水兵信號兵の齋藤春吉だ。

平素勤勉で、無口で、従順な彼が、昨日來は全く別人の如く執拗で、頑固なのに、分隊長も困り果てた。

「又來たのか、人員はもう命令に依つて決定してゐるから、何度來ても變更は出来ない。この次迄待て」と懇ろに諭した。

齋藤水兵は蒼白な顔をして、一つの封書を分隊長の前に差出し、「私は満期延期者で、この次果して戦場に行く機会があるかどうか分りません。私はどうしても満期前に戦地を踏んで、手柄を立てるか、死ぬかせぬと、故郷へ顔向けが出来ません。この度派遣される者の内には、私よりも若い者が居ります。その人達を次の機会に廻して



齋藤一等水兵

戴いて、この度は是非私と代へて下さい。頼みます。頼みます」と、平素寡黙な彼としては珍しい熱辯を以て、聞かなければ切腹でもしうな顔付で、その兩眼からは涙をポロポロ落ちて居る。封書には

今度支那派遣陸戦隊員ニ加名ノ程ヲ御許可下サレ度

誓文

帝國海軍々人ノ名ヲ立派ニ四海ニ發揚スル事ニ努メルト共ニ

大君ノ爲ニ死ス

(了)

と血書で淋漓と認めてある。分隊長は血書と彼の顔とを見較べてゐたが、餘りにも熱心なる態度に、思はずも眼頭を熱くして「ヨシ、それ程迄に思ひ込んでゐるならば何とか考へて見よう」と約して、彼を引取らせた。

五月十日(昭和十三年)、我海軍陸戦隊は、曉の闇を衝いて、厦門砲臺に迫つた、豫て嚴重なる防備を堅めてゐた敵は、スワと計り海岸より猛烈なる砲銃火を浴びせた。我陸戦隊は演習でもしてるかの様な沈着さで、胸に達する水中にザブザブと身を投じて、敵の彈幕の中に突進した。

その先頭に立つて、如何にも嬉しげに敵陣に躍り込んでゐるのは、筋骨隆々たる齋藤一水だつた。

鬼神の如き陸戦隊は、遂に敵岸を占領した。然し泥金社前方の敵は尙頑強なる抵抗を續け、雨の如き彈丸は我陸戦隊員をバタバタと殲した。午前七時、一彈は齋藤一



齋藤一水兵血書の手紙

水の左胸部より右胸部へ貫通した。さすがの齋藤水兵もバタと草叢に打伏した儘最早動けなくなつた。

この時陸戦隊は、更に前面の敵に向かつて躍進を起した。

通りかゝつた山岡部隊長は、血に染つた齋藤を見て、「齋藤しつかりしろ」と勵ました。

齋藤一水はこの聲に意識を取戻したかの如く、眼を見開き、不随の身體を半ば起して右手を高く差上げ、血を吐きながら「天皇陛下萬歳」と叫んだかと思ふと、

兩眼を閉ぢてニッコリ笑みながら崩れた。

部隊長は「齋藤、立派な働きだ。仇は討つてやるぞ、安心せ」と言ひ残して突撃に移つた。

齋藤水兵と一緒に港務部から出征した平野兵曹も、この光景を見てゐたが、部隊が突撃に移つたので、黙禱をしつゝ涙を打ち拂つて敵中へ突撃した。

齋藤一水は「大君ノ爲ニ死ス」と誓文に血書した通り、願叶つて立派に厦門島岸に、彼の所謂幸福なる戦死を遂げたのであつた。

海軍一等水兵 齋藤 春 吉(大正四年二月四日生)戦功ニ依リ海軍三等兵曹ニ進級

七、帝國軍艦乗員として第一線に一人の半島青年

柳七鳳割烹員の感激

昭和十三年二月二十三日、勅令を以て陸軍特別志願兵令が公布され、半島青年も陸軍

志願兵として、現役又は補充兵役に編入され得るやうになつたが、海軍では現在一人の半島青年、柳七鳳割烹員が、帝國江上艦隊軍艦〇〇乗組として第一線に奮闘してゐる。純眞にして勤勉なる柳青年は、全乗員から可愛がられてゐる。本人もこの時局に際して、圖らずも第一線に立つて祖國の爲に活躍し得ることを光榮として喜び、この程その父に宛て、感激の手紙を認めて送つたとのことである。

その手紙の一節に、「三月二十五日に本艦に着きました。御安心下さい。……小生も人生の第一歩です。一生懸命に働いてお國の爲に盡す考で御座います。この非常時局に半島男子は戦線に立つことも出来なかつたが、小生は神様のお蔭で第一線に立つことが出来、この上もなく喜んでゐます。たとへ戦死しても、立派な名譽の戦死者の一人として靖國神社へ行きます。男子の本懐之に過ぎたる事はありません。之から支那兵と戦ひ、決して祖先柳といふ名を穢すやうなことは致しません。御父様よ、決して七鳳が死んだ際には嘆くぢやないですよ。國の爲に役に立つたものと喜んで下

さるでせう。小生はそれを願つてゐます。云々」

と、父柳惠祐宛に感懐を洩らし、決意の程を示したのであつた。このことを傳へ聞いた乗員達は大いに喜びもし、感心もし、益々彼を敬愛して居ることである。もはや内鮮一如などを説く時代ではない。内地、外地を問はず、舉國一致協力、時艱の克服に勇往邁進しつゝあるのが、非常時日本の現實の姿である。

#### 八、陣中からさし延ばされた日鮮融和の手

##### 海軍一等水兵太田光雄の美譽と朴烈

大正十五年三月、大逆罪で内妻金子ふみ子と共に極刑を言渡され、恩命に依つて特に無期懲役に減刑された朴烈(朴準植)が、その後千葉刑務所に服役、靜思十年の末、遂に「日本のために生き、日本の爲に死ぬ」と、斷然思想的轉向を表明した「恭順上申書」を安藤刑務所長に提出し、その後更に三年を閲した昭和十三年になつて、獄中

から舊友某氏に書を寄せ、「いよいよ赤子に還つた日本晴れ」の心境を傳へたことは、既に新聞紙上に報道せられたところであるが、圖らずも上海戦線に在つてこのニュー



太田一水等兵

スを耳にした、上海陸戦隊竹下部隊に属する海軍一等水兵太田光雄は、之を我が事のやうに喜び、自分の僅かばかりの給與の中から金五圓を割いて、「出来得れば朴君に何か美味しい物でも食べさせて下さい」と、警視廳に宛て、(十三年二月十五日)依

頼をした。

その手紙の全文は別記の通りで、その一句、一行にも、太田一水の美はしき尊き真

情が溢れてゐて、二月二十八日小菅刑務所に於て、東京刑事地方裁判所検事局、長谷川検事、日沖事務官立會の許に、警視廳榎本内鮮課長から朴烈に對して、太田勇士の真情が傳へられた時、朴烈は感涙に咽び泣き、益々陛下の赤子として忠誠を盡さんことを誓つたといふことである。

そして朴烈は、この貴き贈物を私すべきものに非ずとして、「どうか内鮮融和事業資金の一部にでも使用して戴きたい」と願出たのであつた。

かくて茲に真心と感謝、戦場の勇士と受刑者の間に、互に國を思ふ一つ心にながつた内鮮融和の花が咲き薫つたのである。

太田一水のこの尊き真心に對しては、唯々感激の外はないが、又一面硝煙彈雨の下、この綽々たる餘裕を見て、寔に頼母しい極みである。

朝鮮總督からは太田一水に對して、次のやうな感謝狀が送られた。

感謝狀

今次事變ニ際シ出征中ノ身ヲ以テ小菅刑務所在所者朴烈ニ對シ慰問狀及金員ヲ贈リ  
 同人ヲシテ之ニ感激セシメ遂ニ同所ニ於ケル内鮮在所者ヲシテ内鮮一體ノ強化ヲ目  
 的トスル事業ノ資金獻納ノ舉ニ出ヅルニ至ラシメタル段感謝ニ堪ヘズ茲ニ深厚ナル  
 謝意ヲ表ス

昭和十三年六月八日

朝鮮總督 南 次 郎

太 田 光 雄 殿

(太田一水手紙の全文)

御願ひ申し上げます。

私は戦場に在る上海陸戦隊員です。今迄度々朝鮮の同胞より 温い慰安を受けて感  
 激して居ります。今日も立派な小學生の慰問文を読んで一同感謝してゐます。

こゝに御願申上げるのは「赤子に還つたあつばねな朴君」にもこの立派な小學生の  
 作文を読んでもらつて一緒に喜んでいたゞきたいのです。

朴君よ、東洋平和のために戦つて居る戦場の戦友達は、君の記事も見て非常に感激  
 し且つ喜んで居る。

見て下さい！次の作文の様に力強い兄弟達である。

君の故郷に住む兄弟は實に立派であると思ふ。

次いで御願申上げます。

同封の金は朴君に何か美味しい物を食べさせて上げ度いと思ひます。では何卒御迷  
 惑でも出来るだけ御願申上げます。

二月十五日

(以下朝鮮兒童作文の寫)



## 慶尙南道晋州郡井村公立普通學校第三年 美 鎬 ト

海軍の兵隊さんへ

わが皇軍よ、わが兵隊さんよ、こんな寒さでもがまんして支那軍を打破つてゐる我が皇軍の有難さは何といふようがありません。

我が海軍は揚子江の附近を守つてもつて支那軍をようちようしておられることゝ思ひます。皇軍早く支那の悪いやつをせいばつしてせいせいどうどうとおかへり下さう。

我が皇軍は今にも一しようけんめいにやつてゐることを、ときどき校長先生からさいて見ると、ほんとうにありがたいと思ひます。

私たちも御國のために勉強をしているが、もし皇軍がなかつたら私らが勉強をすることが出来なかつたと思ひます。皇軍御身を御大切に。

(住所慶尙南道晋州郡井村面花開里)



## 慶尙南道統營郡統營邑大和町統營第一公立普通學校第四年 林 永 寶

我が陸戦隊へ

兵隊さんおかわりはございせんか、私は一生けんめいに勉強してゐます。

勇しい我が兵隊さん。西洋にまけない強い我が日本の兵隊さん。どうぞ東洋平和のためにつくしてください。私はりつばな強い國民となります。

この頃は寒くてはながとれそうになるのにもかゝはらず働くのを見たら、私達も寒さにまけてはいかないと思ひます。

どうぞ我が日本がかつようにして下さい。

(以上原文)

太田一等水兵は横濱市中區伊勢町四ノ一五〇の出身

(イ) 戦線の兄と銃後の妹

美はしき兄妹の至情から生れた国防獻金

左記は島根縣の一工女(後稻村キクエさんと判明)から、国防獻金と共に吳鎮守府に寄せられた手紙であるが、兄妹の純情眞に擲すべきものあり、讀む者をしてそとろに感涙に咽ばしむるものがある。

謹みて申上ます。見渡す四方の山々も日一日と若葉に彩られ蛙鳴く初夏の候と成つて參りました。海軍の皆様には御機嫌御麗はしく御過し遊ばされますことを御慶び申上ます。尙此の非常時局にあたり重大なる任務に當られ日夜忠誠を以て幾多の御苦勞、茲に衷心より謹みて感謝の意を表する次第で御座います。

次に別封いたしましたお金につきましてお願申上たく拙き筆をとりました次第で御座います。

素よりまづしい者の獻金などと御笑ひ草の種ともなりましてはと存じましたが、妾は或る一水兵の妹で御座います。

兄は燃ゆる希望の止みがたく海軍に志願いたしましたして採用され、その後一昨年九月末に上海特別陸戦隊員として重任警備の務めに就きまして以來、彼の地で御奉公いたして居りました折柄、昨年の夏よりの事變に際し上海の戦線に參加の榮を得まして武人として此上なき名譽と存じて居ります。時々私への便りにも軍人としての覺悟と決心を何時も示して居ります。

一方私達銃後の者は已に覺悟いたして居りますが、兄の便りを見る度に大和なでしこの一人として決心は更に堅く愈々強くなるのを覺えるので御座います。八百萬の神々様の御加護により、更に國民銃後の皆様の熱誠によりましてカスリ傷一つ負は

ず御奉公いたして居りますが、忘れもいたしませぬ昨年十月三十一日に兄の便りに接しました。それは十月二十七日の激戦の前夜に認めましたもので、この時こそ軍人としての花と散らむとの覺悟と見えまして、特にやさしくも兄として妹に對して温い心情が綴られてありました。「郡是ニ入ツテヨリ數ヶ年ノ年月ヲ黒ノ仕事服ニ身ヲ包ミ朝夕何一ツノ不平不満モナク孜々トシテ働イテ吳レタソナタニ今日迄斯ンナニ露骨ニ申シタコトハナカツタガ兄ハ衷心ヨリ感謝ヲシテ居ルノダ、此ノ度オ金ヲ少々送ルガ是ハ自分ノ眞心ダト思ツテ其許ノ食ベタイモノ又ハホシイト思フモノヲ買ツテ吳レ、兄ハ其レヲ受ケテ吳レルノガ本望ダ」と、明日は潔く戦死をすると決心した兄が此の世で妹に遺すかたみの積りでありましたでせう。血を分けた兄よりの遺書とも思はるゝこの便りに、泣くまいと努めましたと思はず知らず泣けて泣けて仕方なく、一時は泣きくづれました。

それは悲しみの涙でなく嬉し泣きでありました。敵弾が雨霰と飛び來る中に御奉公せる戦線の兄がいたゝいた貴いお上よりのこの俸給の一部、あまつさへ兄の愛のもつたこのお金、其の心情は終生はおるか私の永久に忘るゝことの出來ない感激で御座います。

然しこのお金だけは如何しても私のために使用いたして自慾を充すことが出來ません。種々考へました上に、せめて國防費の一端にお加へして頂くのが最適であらうと思ひまして早速送金いたしたいと、女ながらも銃後の御奉公に御國の爲に盡す心には變りはないと存じ、平素の小遣を更に節約いたしまして、兄の分と合せて七圓となりました。元より九牛の一毛で御座いますが、何卒賤の女が眞心を御くみとり下さいまして貧者の一燈ともならばこの上なきよろこびで御座います。何卒國防費の一部にお加へ下さる様伏してお願ひ申上ます。

(中略)終に臨みまして大日本帝國海軍萬歳を謹みて唱へ奉ります。

兄は武運目出度十二月五日母港〇〇に歸還、目下非常時の艦隊として行動中の軍

艦〇〇に乘組み御奉公申上て居ります。

昭和十三年五月五日

島根縣仁多郡三成村郡是三成工場内 一工女拜

吳鎮守府御中

(口) 還らぬ海の荒鷲からの國防獻金

韶關空襲に散つた奥西二等航空兵曹の遺書

故海軍二等航空兵曹奥西静夫は、昭和十三年二月二十一日、粵漢鐵道沿線韶關空襲に参加した際、不幸敵弾を受け、愛機諸共肉弾となつて敵陣地に突入、壯烈なる戦死を遂げたものであるが、奥西兵曹は豫てこの事あるべきを豫期し、出陣に臨んで両親宛に次のやうな書翰を送つた。戦死後嚴父桂市氏はこの愛兒の意を體して、金三百圓を吳海軍人事部に持參、海軍航空機製作國防獻金にと獻納した。

明朗快活にして、親しみ深き手紙の文面の中にも、凛たる決死の覺悟が窺はれ、今更に還らぬ勇士に對して、愛惜の情を禁じ得ないものがある。

出動に際し両親に送れる書翰

警備を終へて去る五日歸還致しましたが、漸く整備も完了致しましたので又愈々明十四日の朝八時〇〇航空隊を出發して敵地に向ふことと成りました。又暫



曹兵空筑等二西奥の日しり在

くの別れですけれど今度は〇〇基地に居た様な具合に安閑としては居られません。

敵地の中に在る飛行場ですからね、彈丸も毎日飛んで来るやうな地ですから相當に危険も伴ふことと思はれます。

私達の航空隊の先發隊員は今頃は毎日勇敢な上海爆撃を決行して偉勳を擧げて居ります。

今度は私達の番ですよ。大いに此の際平素訓練して來た腕を試ませう。

昨日の外出で下宿の整理もすつかり片附きました。萬一の際は下宿の私品を御受取り下さい。決してひげは取らぬ覺悟です。凱旋の日を御待ち下さいませ。

若し歸らぬ身と成つた際には左記下宿に御通知又は訪問して下さいませ。

一、大分縣南海部郡佐伯町驛前通 長門旅館 岡部 茂様方

お預けした品物「トランク」二個です。

一、長崎縣東彼杵郡竹松村 佐藤療院 佐藤寅藏様方

お預けした品物「トランク」二個及「テーブル」、椅子、「テーブル」掛、郵

#### 便貯金通帳一通、硯箱、置時計

右の通り佐伯と大村と兩方に預けてありますから宜敷く御願ひ致します。其の内大村に預けてある郵便貯金通帳は現在高證明を致してありますが、五百五拾圓程あります故萬一の際は國防獻金に獻納して下さいませ。

最後にお母様はお體が弱いのですから取わけてお體に氣をお付け下さいませ。

私は一人身ですから何の心配もありません。只々一意専心報國の誠を效す決心、決して御心配下さいませ。鐵夫、秋夫も早く歸阪の日を祈つて居ります。

吳々も御體に充分保養成下さいませ。組内御皆々様にも宜敷御傳へ下さいませ。

明日は八時に飛行場を飛び出しますので今夜は早く寝みます。六時間も七時間もとぶのですからね。失禮致します。

九月十三日夜

靜 夫

御父母上様

海軍二等航空兵曹 奥西静夫略歴

原籍 廣島縣御調郡久井村大字吉田九一九  
 生年月日 大正三年十一月二十六日  
 入團 昭和七年六月一日 吳海兵團  
 現官任用 昭和十一年十一月一日 任海軍三等航空兵曹

(八) 美術報國

「不動明王」の名作その他獻納佳話

今次事變の勃發以來、我が九千萬同胞の各部、各方面から、皇軍に寄せられつゝある國民的赤誠の至情、感謝感激の渦巻は、或は獻金となり、慰問品となり、或は涙くまじき勤勞奉仕となつて現れ、皇軍將兵を感泣せしめつゝあり、今や聖戰の進展と共に

に、我が國は愈々舉國一致態勢を強化しつゝあるが、こゝに又戰爭とは縁の遠い美術家並に美術にたづさはる人々の床しき奉仕美談がある。

彫刻家としてその名を知られてゐる橋本高昇氏は、今次事變の當初から我が第三艦隊(支那方面艦隊)旗艦出雲が、黃浦江上砲煙彈雨の眞只中に在つて、毅然として戦闘を指揮し、外交を處理し、克く危局に立つて重大任務を全うせる雄姿を想見し、而も幾度か空からは爆彈を集中せられ、或は水中より魚雷の襲撃を受けたにも拘らず、その爆煙水煙の消ゆるや、いつも戦闘旗翻るたる不死身の巨體を江上に横たへ、英姿颯爽いよいよ全軍の信賴を集め、士氣を昂揚せる事實を聞いて、感激措く能はず、不動明王もかくやと思ひつき、早速旗艦出雲の精神を象徴する「不動明王」の木彫創作にとりかゝつたのである。

爾來數ヶ月、日々齋戒沐浴して力作したものがこの程出來上り、氏は之を支那方面

艦隊旗艦出雲に獻納(昭和十三年)の手續きをとつた。數ある獻納品の中でも、かうした藝術家の魂の籠つた名作は又格別で、永く記念品として軍艦出雲のケビンに飾られるであらう。

昭和十三年五月三日から同十九日迄、東京上野の府美術館に於て、第一美術協會の作品展が催されたが、この作品展は、いつものものとは趣旨を異にし、出品者は全部國防獻金を目途とした、所謂獻金畫を製作することとし、もし賣れなかつた場合には、出品者自ら之を買つて獻金に充てるといふ、變つたもので、かくして得た賣上金數百圓を陸海軍に獻金し、尙出品畫十數點を傷病兵慰問品として獻納した。

又第一美術協會會員の松見(同夫人)、石川、高橋、三國、富岡、御厨、河邊等の諸畫伯は、夫々各作品數點を、南支作戦に従事しつゝある海軍航空隊將兵慰問の爲、海軍省を通じて〇〇航空隊に獻納した。

(終)

388  
409

昭和十四年三月二十五日 印刷  
昭和十四年三月二十八日 發行

【定價金拾錢】  
送料金參錢

編纂者

海軍省海軍軍事普及部

東京市麹町區丸ノ内二丁目二十番地  
社團法人海軍協會

發行者

野間久治郎

東京市芝區新橋五丁目二十六番地

印刷者

小林繁次郎

東京市麹町區丸ノ内二丁目二十番地 郵船ビル内

發行所

社團法人海軍協會

電話九ノ内(24) 二二七七九  
二二七七九  
振替口座東京 三九二〇五七二八番

終



海軍協會徽章

定價金拾錢